



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

## コロナ禍における保健体育科授業の学び： 中学生の視点からの考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): Health and Physical Education Class, Coronavirus Pandemic, Junior High School Students 作成者: 上野,佳代, 佐見,由紀子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/00173600">http://hdl.handle.net/2309/00173600</a>

# コロナ禍における保健体育科授業の学び

— 中学生の視点からの考察 —

上野 佳代\*<sup>1</sup>・佐見 由紀子\*<sup>2</sup>

教育実践創成講座

(2021年9月13日受理)

## 1. はじめに

2020年2月27日、政府からコロナ感染防止策としての休校措置要請により始まった3月からの全国一斉休校は、5月下旬の緊急事態宣言が解除されるまで継続され、その後も分散登校や時差登校を強いられる学校も少なくなかった。通常の時程で学校が再開となっても、各教科での活動の制限、行事の延期や中止、部活動の制限等は継続され、いまだに正常な学校生活は戻ってきていない。長期間において、子どもたちに我慢を強いる状況は依然として続いている。

中学校では2021年度に新学習指導要領の全面実施となり、新たな学びを推進していく年となるはずであった。しかし学校現場は、終息の見通しが立たない現状をふまえ、その対策に終始しているばかりである。小、中学校の校長、副校長を対象にしたアンケートでは、第二波に備えることとして、感染予防策の徹底と児童生徒自身の意識の定着、リモート授業やオンライン授業の進め方の研修、児童生徒のストレスからくるいじめや不登校防止のための早期発見および早期解消、行事の調整や見直し、教育課程の再編成が挙げられていた<sup>1)</sup>。長い休校で失われた授業時数を取り戻すこと、そのために教育課程を修正すること、ストレス下での子どもたちの心身のケアに追われているといえよう。

しかし、子どもたちの学びを保障するということは、不足した授業時数を補うだけでよいのだろうか。高階は「どうしても学習内容の指導に偏りがちにはなるが、何よりも子供が主体的に学習に取り組む自己発現の姿勢を重視すべきであり、将来、課題に遭遇した時

に多様な方法を駆使して解決しようと努力するようになる<sup>2)</sup>ことを意識するべきと述べている。また、秋田は「授業時数が限られているからこそ、教科書「を」すべて予定どおり「こなす」という発想から、学校の授業でしかできない学びのポイントは何かをおさえ、それを授業で行うことで、剥落しない深い学びをめざしたい」と提言している<sup>3)</sup>。子どもたちがどのように育ってほしいのか、そのために何を教えていくのかを中心に考えることを忘れてはならない。奈須は、子どもを自律した能動的な学び手に育て上げるために学校が最優先に取り組む課題として、「どうすれば時数不足の下でも子どもに質の高い学びを保障できるか?」「どうすれば、子どもの学びを止めない学校とすることができるか?」「どうすれば、子どもをアクティブ・ラーナーに育てることができるか?」の3つを挙げている<sup>4)</sup>。今、学校で求められているのは、コロナ禍によってもたらされた損失を埋めることだけでなく、子どもたちが予測不能な社会で生き抜き、活躍していくために深い学び、質の高い学びをどうすれば実現することができるのかを考えることであろう。

また、学校現場では、授業時数を確保するために7時間目の設置や土曜授業の実施、感染防止のための休み時間や昼食時間のおしゃべり禁止、学校行事の中止等を実施している。これらは感染防止には必要なことではあるが、子どもの思いに寄り添うことにはならない。このような状況に対して、ポスト・コロナにおける授業づくりはどうあるべきか、さまざまな場で語られるようになってきた。さらに、このコロナ禍での学びを考えていくために、学びの主人公である子どもの思いや学びの軌跡を捉えることも求められている。石

\* 1 東京学芸大学附属 小金井中学校 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)

\* 2 東京学芸大学 教職大学院 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)

井は、「休校中、こどもたちは何をしていたのか、どのような経験をしてきたのか、登校している今、何を感じ、何を求めているのか、これらを聴きとるところから始める必要がある。」とし、子どもたちの姿を丁寧に見とる、対話的な評価の必要性を述べている<sup>5)</sup>。学びの主人公である子どもたちの思いを読み取り解釈することによって、今の子どもたちに適した授業づくりが可能になってくるといえよう。

また、野井は、2度のコロナ緊急調査では、子どもの困りごとと保護者の困りごとの上位5項目が微妙に異なることを明らかにし、大人の認識と子どもの学校の存在意識にはズレがあることを紹介している。例えば、子どもの困りごとは1位:外に出られない, 2位:友達に会えない, 3位:運動不足, 4位:感染症が不安, 5位:勉強を教えてもらえないであったのに対し、保護者の困りごとは、1位:運動不足, 2位:勉強を教えてもらえない, 3位:外に出られない, 4位:感染症にかかる, 5位:友達に会えないであったと指摘している<sup>6)</sup>。このように、子どもたちの実情や思いは大人が感じているものとは微妙に異なることを留意していかなくてはならない。その理解のうえで、子どもたちに何が必要かを大人たちが十分に検討し、学校生活や教育課程が再編成されるべきである。さらには、森がこれからの学校の在り方として、「学びに関わるあらゆる事柄に、すべての子どもが自由に意見を表明することができる応答的な関係を紡いでいくこと、このような応答的な関係から参加型の学びを積極的につくり、すべての子どもに学びの主体としての力を保障していくこと」<sup>7)</sup>を提言しているように、子どもの意見を尊重し受け入れていく場を設定することも求められている。よって、子どもの視点から現状を分析し、今

後の学びの在り方を考えていくことが、現在必要なこととなっているといえる。

## 2. 目的

本校の保健体育科の目標は、「運動やスポーツの楽しさを追究し、自立した生涯運動・スポーツ実践者を育成する。」である。ここには、体育分野だけでなく、保健分野での「自分の心や体を見つめ、健康であることを追究し、幸せな生活を目指す実践者を育成する。」という目標も含まれている。授業での実践から、運動やスポーツが自分にとって価値があると認知するとともに、卒業後も生涯にわたって運動やスポーツに親しみ、豊かで幸せな生活を営んでいくことを期待している。

しかし、2020年度(令和2年度)10月に、スポーツ庁はコロナ感染防止を踏まえた体育の取り扱いにおいて、武道では基本動作は特定の相手と行う、攻防は特定の人数で組み合わせる時間は活動時間の1/3程度とする、球技ではボール操作は特定の少人数で、相手との身体的距離を確保する、ゲームでは近接する場面の頻度が多くなならないよう工夫する等の行い方<sup>8)</sup>を通知した。そのため、本校でも接触を避けることができる種目や活動の選定が求められ、カリキュラムの見直しおよび変更を行った。具体的には、直接、身体接触の多い柔道や、個人での種目である体づくり運動は削除し、来年度に実施する。中でも、生涯にわたって様々な人と楽しむことができ、ゲーム性の高い球技を中心に取り上げることにした。そのうち、接触場面が多くなるゴール型は避け、ネット型またはベースボール型を実施することとした(図1参照)。その他に、

○数字は各単元の時数

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
種目	陸上競技 <sup>⑩</sup> ・短距離走・リレー ・走り高跳び		体づくり運動 <sup>④</sup> 水泳 <sup>⑧</sup>		選択球技 <sup>⑭</sup> ・アルティメット ・ソフトバレーボール 3on3,フットサル		武道:柔道 <sup>⑫</sup>		球技:ネット型 <sup>⑫</sup> ・卓球 ・バドミントン		体育理論 <sup>④</sup>
							保健 <sup>⑮</sup>				

↓

修正後、実施できなくなった種目

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
種目	(休校)		(分散登校) ソフトバレーボール <sup>④</sup>	(分散登校) 水泳 <sup>③</sup>	選択球技 <sup>⑫</sup> ・アルティメット ・ソフトバレーボール		陸上競技 <sup>⑫</sup> ・短距離走・リレー ・走り高跳び		球技:ネット型 <sup>⑫</sup> ・卓球 ・バドミントン		体育理論 <sup>④</sup>
							保健 <sup>⑫</sup>				

図1 2020年度年間指導計画(中学2年生)の変更

種目の削減だけでなく、三密を避けるために、活動の仕方にも制限は及んでいる。

このような状況下において、生徒が学んだことは何だったのか、またこれからの保健体育科授業に期待していることは何か、さらには保健体育科授業に期待している学びはどのようなもので、それはどの程度達成できたのかといった生徒の実情や思いを知る必要がある。そこで、本研究では、コロナ禍における教育課程変更に対する意識や、保健体育科授業における学びの内実を明らかにすることを目的とした。さらに、今後の保健体育科授業の在り方に対する課題を検討することにした。

### 3. 研究の方法

#### 3. 1 対象

本校の73期生140名（男子70名,女子70名）を対象とし、2年次にアンケート調査、自由記述のレポート記入、3年次にグループインタビュー調査を実施した。

#### 3. 2 研究Ⅰ アンケート調査

生徒の生活の現状を把握するために、学校が再開された6ヶ月後の2020年12月に無記名自記式の「コロナ禍における生活の変化についてのアンケート」を実施した。質問項目は以下のとおりである。

- ①今年度、中止（あるいは延期、縮小）になってしまった学校行事に関して、「とても実施したかった」・「実施したかった」・「どちらともいえない」・「実施しなくてもよかった」の4件法で回答を求めた。
- ②実施できてよかったと思う行事や活動について自由記述での回答を求めた。
- ③コロナの自粛明け以降、学校行事や授業、家庭生活、健康状態、対人関係など11項目に関する変化について「よかったこと」と「困ったこと」を自由記述で回答を求めた。

#### 3. 3 研究Ⅱ レポート記入

特に、保健体育科授業に焦点をあて、2021年3月に、保健の授業において「コロナ禍で私たちは何を学んだか？」のテーマで自由記述のレポートとして回答を求めた。項目は以下のとおりである。

- ①2年生で学んだこと
- ②体育の授業で学んだこと
- ③その他

#### 3. 4 研究Ⅲ グループインタビュー調査

中学3年に進級後、前期の授業を終えて、保健体育科授業における学びに変化があったか、今後何を望むかを把握するため、2021年7月の保健の授業において、グループインタビューを実施した。対象生徒は各クラスから、これまでの保健の授業の学習ノートを参考にして、考え方の異なる5～6名を抽出した。質問は、以下のとおりである。

- ①体育の授業で学んだこと、学ぶことは何か？
- ②コロナ禍での授業を経験して気づいたこと、わかったことは何か？
- ③これからどんな授業を実施したいか？

### 4. 結果と考察

#### 4. 1 研究Ⅰの結果と考察

##### 4. 1. 1 行事の実施

本校の年間行事として生徒の関心が高い3つの行事の実施の是非についての考えをアンケート調査で確認した。

##### (1) 修学旅行

本校では修学旅行を各学年で毎年実施しているが、対象の生徒たちの2年生での修学旅行は、2泊3日で実施する予定が、日帰り旅行に変更して実施された。例年通りの修学旅行を「とても実施したかった」は48%、「実施したかった」は32%であり、80%の生徒が実施を希望していた。自由記述欄には、「宿泊を楽しみたい」「事前学習を頑張った」「現地でしかできない学びがしたい」といったことが挙げられていた。一方、8%の生徒が「実施しなくてよかった」と答えている。理由として「コロナで危ない」「日帰りでは学べない」「興味がない」といったことが挙げられていた。

##### (2) スポーツフェスティバル

異学年で構成される縦割りチームで、全校でのクラス対抗の球技大会である。本校では運動会等がないため、唯一の体育的行事であり、体育の授業での学びの成果を発表する場でもある。例年は、アルティメット、3on3、フットサル、ソフトバレーボールの4種目で実施していたが、今年度は接触場面が多いということで3on3、フットサルを削除した。また、4クラス対抗で行われていたが、密集を避けるために2クラス対抗の2部制とした。例年通りのスポーツフェスティバルを「とても実施したかった」が52%、「実施したかった」が32%であり、84%の生徒が実施を希望していた。理由としては「他学年と交流できる」「ス

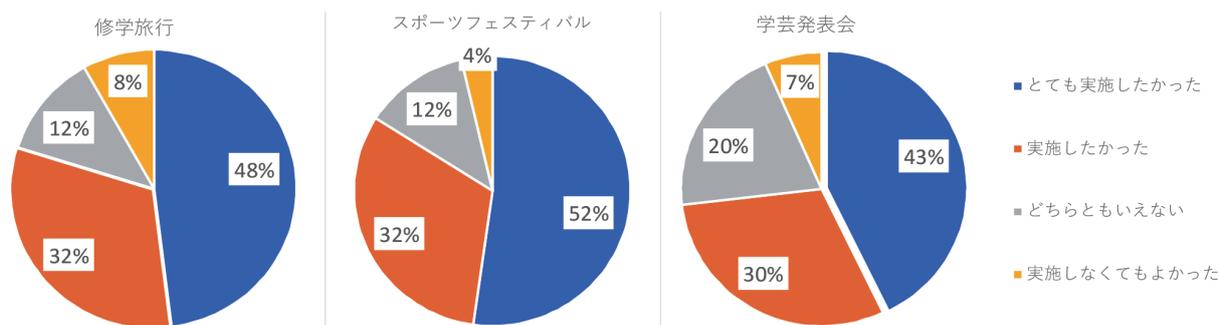


図2 行事の実施に対する希望の割合

スポーツが好き」「他のクラスと対戦したかった」等が挙げられていた。一方、4%が「実施しなくてもよかった」と答えていた。理由は「コロナ感染のリスクがある」「スポーツは苦手」が挙げられていた。

### (3) 学芸発表会

クラス展示とステージ発表で構成されている学芸発表会は、今年度は、クラス展示はなし、ステージ発表は内容を縮小するとともに鑑賞生徒を半数にして2部制で実施した。例年通りの学芸発表会を「とても実施したかった」が43%、「実施したかった」が30%であり、73%の生徒が実施を希望していた。理由としては「文化部の成果が見られる」「みんなで楽しめる」が挙げられ、「クラス展示がしたかった」「全員で見たかった」という記述も見られた。一方、7%(9人)が「実施しなくてもよかった」と答えていた。理由は「物足りない」「コロナ感染のリスクがある」といったことが挙げられていた。

### (4) 実施したかった行事・活動

実施できなかったが、実施したかった行事・活動として、41%の生徒が部活動を挙げていた。理由は、「練習もできない」「大会や試合がない」「みんなと活動できない」「楽しみがなくなった」といったことが挙げられていた。本校では、学校が再開しても部活動は原則中止であり、許された大会等に参加する場合のみ、そのための練習として活動が許されていた。部活

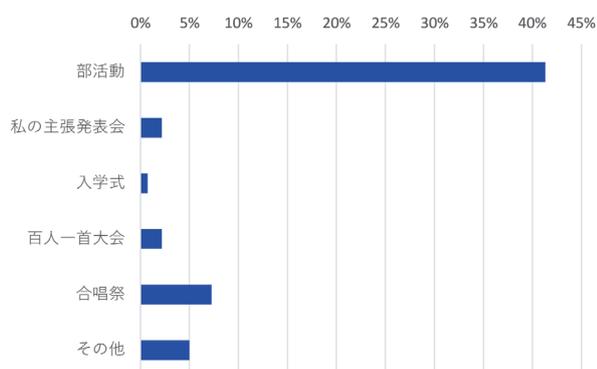


図3 実施したかった行事・活動

動は、生徒が希望して加入するものであり、もっとも関心が高い活動であるため、「練習ができない」「ストレスがたまる」といった楽しみがなくなるだけでなく、「大会に参加できない」「上級生や下級生と交流ができない」といった活動から得られる自己実現やコミュニケーションの場を失うというつらさも感じ取ることができた。

以上のことから、多くの生徒がコロナ禍であっても、例年通りに行事や活動を実施したい生徒が8割近くいることが明らかになった。その理由として、「宿泊を楽しみたい」「スポーツが好き」「みんなと楽しめる」といった情動的なものだけでなく「現地でしか得られない学びがある」「他学年と交流できる」「活動してきた成果を見ることができる」といった、活動を通して得られる学びの価値を求めているものもあった。

### 4. 1. 2 生活が変わって良かったこと・困ったこと

コロナ禍での生活が変化したことによって、項目別に「良かったこと」または「困ったこと」をそれぞれ記述させた。その中で、特に以下の6項目について取り上げる。(図4参照)

#### (1) 授業内容や進度

「良かった」は41%、「困った」は68%であった。「良かったこと」の内容は、「進度がゆっくりで理解できた」「復習ができた」「分散登校時は集中できた」といったことが挙げられていた。「困ったこと」では、「進度が速い」「深められない」「話し合いや交流がない」「美術が技術の製作時間が短い」「課題が多い」「進度が速い」といったことが挙げられていた。ここには、進度が速いと感じる生徒と遅いと感じる生徒が混在しており、慣れない授業の進め方に対応できた生徒とうまく対応できなかった生徒が存在したと受け取ることができる。また、話し合いや実技教科の取り組み等、時間を要する活動が削減されていることに不満を感じていることも明らかになった。

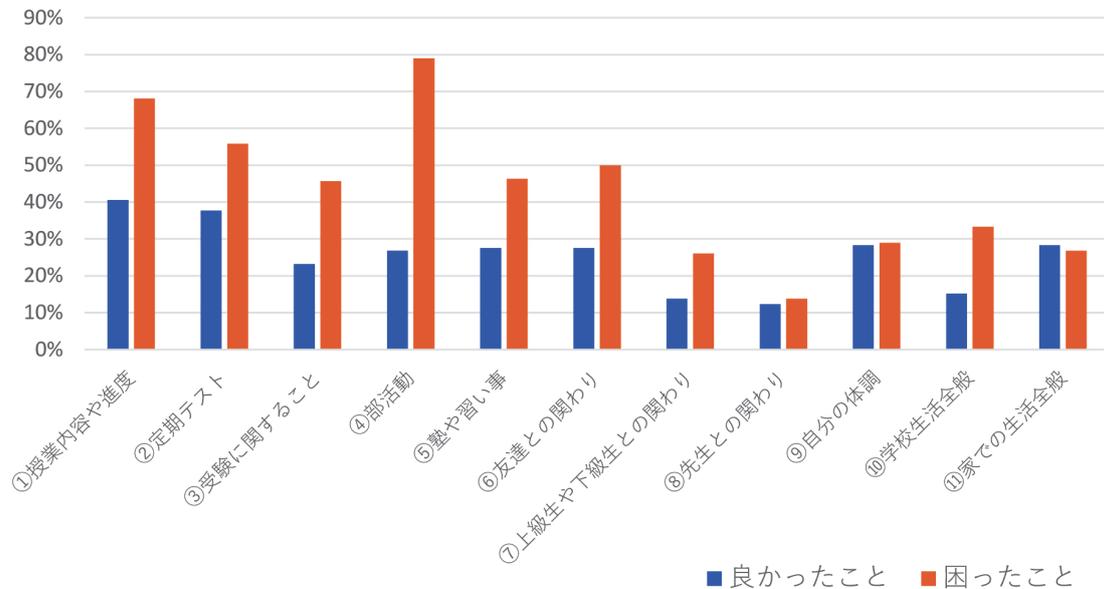


図4 生活が変わって、良かったこと・困ったこと

### (2) 部活動

もっとも記述が多かった項目であり、「良かった」が27%に対し、「困った」は78%であった。「良かったこと」の内容は、「少しだけ練習ができた」「1回1回が充実してできた」「1年生と交流ができた」といったことが挙げられていた。「困ったこと」の内容は、「時間がない」「練習ができない」「スキルが落ちた」「大会がなくなる」「先輩や後輩と交流できない」といったことが挙げられていた。本校は、9割近くの生徒が部活動に加入しており、その多くの生徒が困ったと感じていることが明らかとなった。また、他の活動と比較して部活動に対しての期待が大きいことも明らかになった。

### (3) 友達との関わり

「困った」が50%であり、「近づきにくくなった」「SNSでしか交流できない」「同じグループでしか話さない」「友達が減った」「うわさを立てられる」といった内容が挙げられていた。約半数の生徒が、登校できずに対面で接することができないことから、今まで通りの友達関係やコミュニケーションをうまく築くことができないのではないかと不安を感じていたと考えられる。

### (4) 先生との関わり

「良かった」が12%、「困った」が14%でほぼ同数であった。「良かったこと」では、「担任の先生がしっかり話を聞いてくれる」「分散登校時はたくさん質問できた」「前よりも話げができた」「電話やTeamsで話げができた」といったことが挙げられていた。「困ったこと」では、「担任が変わった」「なかなか会えない」

「質問しにくい」「面談が増えた」「マスクなので新しい先生の顔がわからない」といったことが挙げられていた。教師が生徒に連絡を取ることに對して、良かったと感じる生徒と困ったと感じる生徒が混在することは中学2年生では当たり前のことと受け取ることができるが、生徒の多様な要望に対応しきれていなかったとも考えることができる。

### (5) 自分の体調

「良かった」が28%、「困った」が29%とほぼ同数であった。「良かったこと」では、「睡眠時間が増えた」「マスクや手洗いを意識しているから元気」「体調管理を考えるようになった」「運動に気を使うようになった」といったことが挙げられていた。「困ったこと」では、「運動すると苦しい」「だるかったり疲れたりする」「お菓子を食べるようになった」「生活習慣が乱れる」「昼夜逆転」「少しでも体調が悪いと気になる」といったことが挙げられていた。どちらの内容も、コロナによって生活が変化したからこそ、自身の体調に気を配るようになったことがわかる。

野井は、通常の教育ができなかった休校中に、子どもたちは、「学校がないと生活リズムが乱れる、登下校だけでも体力がつく、知らず知らずのうちに感染症の知識を身につけている」等大事な学びをしていたことを指摘している<sup>6)</sup>。対象の生徒も同様に、コロナ禍だからこそ、自分の体調によく気づくようになったり、健康管理を意識したりすることは、数少ないメリットとして受け取ることができる。

### (6) 家での生活全般

「良かった」が28%、「困った」が27%であった。

少数ではあるが、唯一「困ったこと」より「良かったこと」が上回った項目である。「良かったこと」では、「家事が手伝えた」「自由な時間が増えた」「家族と関わる機会が増えた」「自分のペースで勉強ができた」といったことが挙げられていた。閉鎖的な生活の中でも、ポジティブな思考を持つことができたと思えることができる。一方「困ったこと」では、「生活リズムが乱れた」「ゲームをする時間が増えた」「マンガや携帯を見てしまう」「つまらない」「家族との付き合い方」といったことが挙げられていた。

#### 4. 2 研究Ⅱの結果と考察

授業後のまとめのレポートであるため、自由記述で回答を求めた。そこで、記述内容から重要アイテムを

拾い出し、サブカテゴリー、さらに重要カテゴリーを抽出して整理した(表1, 表2)。そして、そのカテゴリー数を図5, 図6に示した。ここには、一人の生徒が複数の意見を記述していることもあるため、複数の重要アイテムやカテゴリーに重複していることもある。

##### 4. 2. 1 2年生で学んだこと

一斉休校でスタートした2年生が、分散登校、時差登校を経て通常の学校生活を送ることができたのは約6ヶ月間であった。

不安定な学校生活を送る中で、もっともアイテムが多く含まれているカテゴリーは「自分の見つけ直しと変革の在り方」であった。一人で過ごす時間が増えた

表1 「2年生で学んだこと」のカテゴリー

サブカテゴリー	重要カテゴリー
<ul style="list-style-type: none"> <li>・今までの日常生活が当たり前でないことの気づき</li> <li>・変化に対応する力の大切さ</li> <li>・新しい環境に対応する力の必要性</li> </ul>	日常や環境の変化への適応力の必要性
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分をコントロールして律すること</li> <li>・一人で考えて行動すること</li> <li>・自分に向き合うこと</li> <li>・新しいことを見つけ挑戦すること</li> </ul>	自分の見つけ直しと変革の在り方
<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常生活を大切にすること</li> <li>・限られた時間で何をするのかの判断</li> <li>・時間の有意義な使い方</li> <li>・生活リズムを整える必要性</li> <li>・計画的な勉強や物事の進め方</li> </ul>	生活リズムの調整と時間の有意義な使い方
<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーション力の大切さ</li> <li>・他人との関わりで得られること</li> </ul>	コミュニケーションの必要性と関わり方
<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達と一緒にいる幸せと意義</li> <li>・友達とのかかわり方に対する不安</li> </ul>	友だちの価値の再確認と関わり方
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の存在価値の認識</li> <li>・学校での活動や行事の重要性</li> <li>・部活動の重要性</li> <li>・学ぶことの意義</li> </ul>	学校の存在価値の再認識
<ul style="list-style-type: none"> <li>・IT機器の活用</li> <li>・ネット利用の時に気をつけること</li> <li>・オンライン授業の勉強のしかた</li> </ul>	IT機器のメリット・デメリットの確認
<ul style="list-style-type: none"> <li>・感染症対策の認識と必要性</li> <li>・体調管理の重要性への気づき</li> <li>・自分の体や体調に敏感になること</li> <li>・運動の必要性和その効果</li> </ul>	健康維持と体調管理への気づきと必要性
<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍だからこそ得た学び</li> <li>・家の中での過ごし方の気づき</li> </ul>	コロナ禍だからこそ得たメリット
<ul style="list-style-type: none"> <li>・幸せについての再認識</li> <li>・全力で生きることの大切さ</li> </ul>	生きるということの再認識

表2 「保健体育の授業で学んだこと」のカテゴリー

サブカテゴリー	重要カテゴリー
・ 友だちやチームでやるスポーツの楽しさ ・ 協力して活動することの重要性 ・ 友だちと成長できること	友だちやチームで活動するスポーツの楽しさと重要性
・ 運動やスポーツの爽快感と楽しさ ・ 運動を継続することで得られる効果	運動やスポーツの楽しさと効果
・ 自分に適した行い方を考える大切さ ・ チャレンジすることの重要性	自分に適した行い方を考える重要性
・ 感染防止をしながらのスポーツの行い方 ・ コロナに対応する方法	感染防止を意識したスポーツの行い方
・ 体の使い方と技術の認知 ・ 体の使い方と技術の認知	体の使い方と技術の認知
・ 事故防止の心得と対策 ・ 事故防止の心得と対策	事故防止の心得と対策
・ 生活習慣病の予防と対策 ・ 生活習慣病の予防と対策	生活習慣病の予防と対策
・ 健康と幸せな生き方に必要なこと ・ 健康と幸せな生き方に必要なこと	健康と幸せな生き方に必要なこと

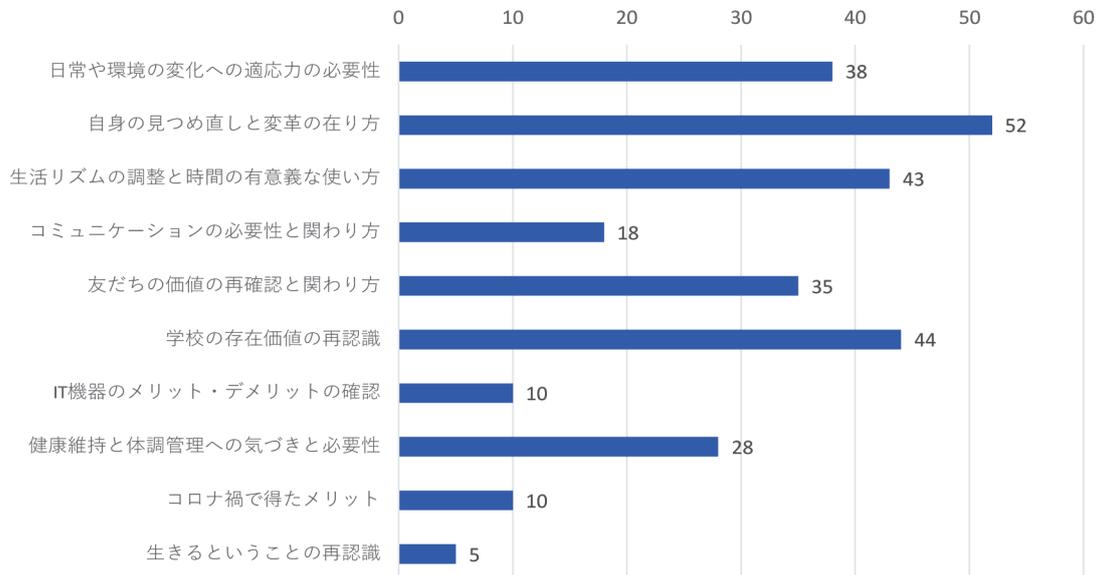


図5 「2年生で学んだこと」の重要カテゴリー数

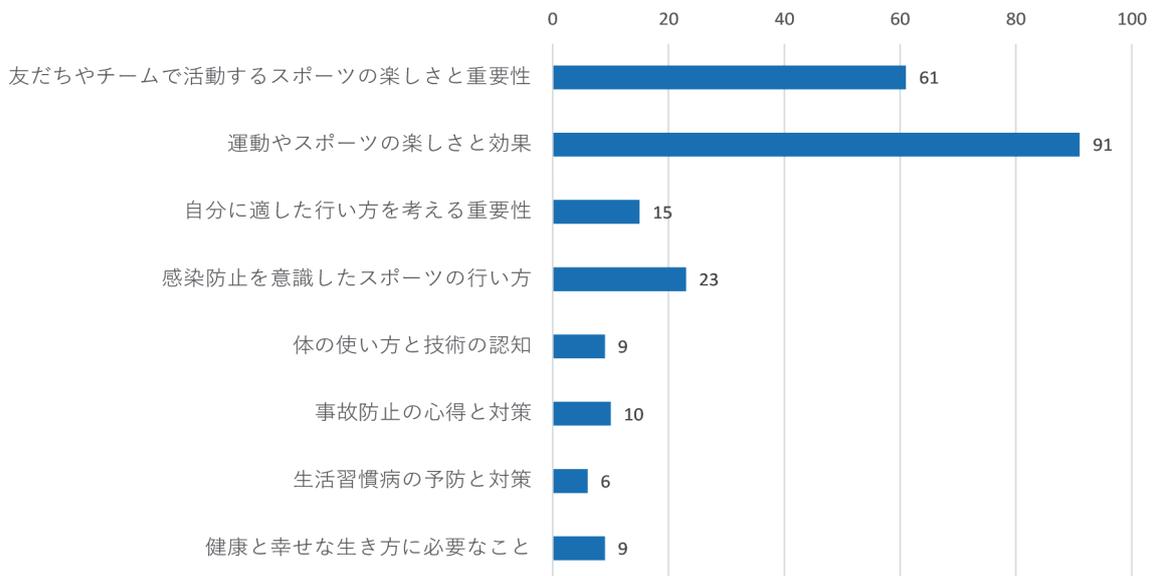


図6 「体育の授業で学んだこと」の重要カテゴリー数

ために、自分に適した目標を設定したり挑戦したいことを考えたりするといた、自分を律して変えていこうとする思いが生まれたのだろう。自分自身と向き合い、自分から動かなくてはならないと考えるようになったのではないだろうか。「日常や環境の変化への適応力の必要性」や「学校の存在価値の再認識」もアイテム数が多いカテゴリーであった。環境の変化に戸惑いながらも、これからどう適応していくべきかをポジティブに思考するたくましさを感じとることができる。「友だちの価値の再確認と関わり方」も多い意見であり、友達を必要とする気持ちを改めて確認していたことが考えられる。

#### 4. 2. 2 体育の授業で学んだこと

もっともアイテム数が多かったカテゴリーは、「運動やスポーツの楽しさと効果」であった。長い期間、十分に運動やスポーツをすることができなかつたために、久しぶりに実践することで得られる爽快感や体力面での効果を実感していたと受け取ることができる。しかし、そこからは体を動かすことへの欲求と必要は見受けられるが、そのスポーツ特有の魅力を感じ取るといった深い楽しさまでは達していないことが読み取れる。授業で行った種目数の少なさや単元の時数が不十分であったことから、楽しさを追求する学びまで到達できなかったとも考えられる。

次にアイテム数が多かったカテゴリーは、「友だち

やチームで活動するスポーツの楽しさと重要性」であった。チームで行うからこそ得られる楽しさや、友達との協力やドバイスに価値を見出している。体育の授業では、単に体を動かすことだけでなく、活動の中で繰り広げられる仲間との関わりが学びとして重要であることを再確認しているといえよう。

また、「事故防止の心得と対策」、「生活習慣病の予防と対策」、「健康と幸せな生き方に必要なこと」は、保健の授業で学んだ内容であり、今後の生活に活用できる学びとして印象に残る内容であったことがわかった。

#### 4. 3 研究Ⅲの結果と考察

生徒たちの発話から逐語記録を作成し、複数の分析者で抽出した重要アイテム、重要アイテムを類型化したサブカテゴリー、さらに重要カテゴリーと整理したものが表3、表4、表5である。

##### 4. 3. 1 コロナ禍での授業を経験して気づいたこと、わかったこと

コロナ禍での体育の授業は、一定距離を保つ、身体接触を避ける等の制限下で行われた。その中でどのような学びが生まれていたかを分析した結果、抽出された次の4つの重要カテゴリーに沿ってまとめる。

##### (1) 仲間の存在と関わり的重要性

チームでの会話や活動中のアドバイスや励ましの声

表3 コロナ禍での授業を経験して気づいたこと、わかったこと

重要アイテム	サブカテゴリー	重要カテゴリー
・ アドバイスが大切 ・ 失敗した時の声の掛け合い	言葉によるコミュニケーションの大切さ	仲間の存在と関わり的重要性
・ 仲間の存在 ・ 普段の生活の仲間とできること ・ 大人になっても協力してやることは大切	仲間との関わり的重要性	
・ ネット越しに対戦するものでも楽しめる ・ 心が近づくことの大切さ。	心の距離の大切さ	運動の楽しさと大切さ
・ 運動することの楽しさの実感 ・ 習慣的に運動することの大切さの理解	運動本来の楽しみ	
・ 体力がないと、登下校もきつくなるという発見 ・ 運動しなくなると生活も乱れて不健康になることの気づき	運動をしない悪影響の気づき	コロナ禍での運動における発見
・ 自分の成長が分かるようになることが楽しい	運動することで成長の気づき	
・ 待機場所を確保すれば行事もできる ・ マスク、手洗いを徹底すれば学校全体で行事ができる ・ 密集しない工夫を先生に提案する	行事实施に向けての工夫	
・ 接触しないようにする ・ 体を目一杯動かすことができない ・ 距離を保たなくてはいけない	コロナ禍における三密の防止	コロナ禍での運動における問題点
・ 他クラスを応援できない ・ 行事で観戦できない悲しさ	コロナ禍における観戦の制限	

かけに気を使うようになり、それまで何気なく交わしていたことが、いかに重要であったことを再確認していた。また、普段、学校生活を共にしている友達と活動するからこそ価値があると感じていた。

#### (2) 運動の楽しさと大切さ

球技では、身体接触場面が少ないネット型スポーツを行った。「接触しない」「距離をとる」等の注意を受け、窮屈さを感じるとともに「こんな状態で楽しむことができるのだろうか?」と疑問も持っていた。しかし、「距離のことなど考えたこともなかったが心が近づけば楽しむことができる」と発言しているように、同じスポーツを共有することから生まれる楽しさを発見していた。また久しぶりの体育の授業で「運動することって楽しいなと改めて知ることができた」という発言からも、運動することの大切さを実感していることが読み取れた。

#### (3) コロナ禍での運動における発見

運動する機会が減り、体力が落ちることだけでなく、生活の乱れにもつながってしまうことを痛感していた。また、運動することでだんだんと体が動くようになる自身の成長を楽しみにしているといった発言も見られた。さらに行事(スポーツフェスティバル)が、規模を縮小して実施されることに対して仕方がないと思いつつも、感染防止をしながらも工夫すれば可能になるのではないかと考えている。「密集を避けるために待機場所を設置する」等、具体策もあげられていた。

#### (4) コロナ禍での運動における問題点

体を思いきり動かすことができないことが、自分にとっては大きなダメージであったことを挙げていた。また、自分の活動以外にも仲間の試合を応援したり観戦したりといった「見るスポーツの楽しさ」も再確認していた。これらのことから、生徒が現状を受け入れ、自分と仲間、そして運動との関係性を新たな視点で見つめ直していたことがわかった。

### 4. 3. 2 保健体育の授業で学んだこと、学ぶことは何か

ここでは抽出された以下の9つの重要カテゴリーに沿ってまとめていく。

#### (1) 認め合い高め合う関係づくり

自分にはないものを友達の姿から見つけたり、できないことを教えてもらったりといった活動を共にすることで、お互いを高め合うことができると発言している。また、「できない人や得意な人もいるから、そのメリット、デメリットを認め合って、関係を作る」という学びも生まれていた。技能差や性差等の違いを超

えて、その場を共有する異質な仲間と活動することに価値を見出している。

#### (2) 仲間の意見や気づきの大切さと自己認識

「アドバイスし合ったり、一緒に高め合ったりすることで、一人ではできないことがいっぱいある」と発言しているように、自分では気づくことができなかったことを、友達の意見を聞くことで、自分の考えを修正したり、再考したりすることができる重要性を見出している。また、体育では、動いている自分の姿を観察することは難しいため、仲間が自分のことを客観視してくれたり、互いに評価し合ったりすることは重要なことであり、その大切さを感じてとっていることがわかる。

#### (3) 仲間とのコミュニケーションの大切さ

体育は「他人と積極的にコミュニケーションをとれる機会」と認識し、そこから「きずなや達成感を得ることができる」と発言している。さらには、単元ごとにチームのメンバーが変わることで新たな発見や気づきを得ることができ、それ自体を楽しんでいる。体育でのチームは、単なる仲良しグループではなく、むしろメンバーが変わることを期待もしている。誰とでもスポーツをたのしむことができるという基本的な姿勢が育っているといえる。

#### (4) 学校ならではの活動の必然性

部活動やクラブチームの仲間とは、共通の目標を持って活動しているが、それとは異なる体育では、普段の学校生活を共に過ごしている仲間と活動すること自体に価値を見出している。学校での仲間と一緒にできることの大切さを改めて感じている。

#### (5) 自分のために必要なものを見つけるための積極的な取り組み

「自分のために何が必要かを見つけてやるのは体育から始まる」という発言があった。そこから、チャレンジする、または試行錯誤するといった活動が生まれてくる。多くの発言に共通している「自分で見つける」ということが重要であり、さまざまな場面や状況においても、積極的に取り組む力を発揮することが期待できる。

#### (6) 体の動かし方の習得と伝え方

「体の動かし方を学べるのが体育である。」という発言があった。その動かし方を互いに伝え合うためには、どのような言葉や見せ方が適切か、それを考えていくことが重要であり、そこに学びが生まれていると感じている。

#### (7) 運動の楽しさと必要性

全力で体を動かすこと自体が楽しいと感じ、楽しむ

ことで心が浄化されるとも感じている。そして、楽しむことが健康にもつながるとしている。もっとも根本的な学びではあるが、体を十分に動かすことができなかった期間が長かっただけに、改めてその楽しさの必要性に気づいている。

(8) 保健と体育の共通性

「保健は体育の活動場面に関わることが多い」と発

言している。例えば、熱中症の学びは、気温が高い時の運動への気遣いに役立つし、体の機能に関する知識は、体の動かし方を考える際に役立つと発言している。このように関連性が存在することに気づいている。

(9) 健康の保持と自分の体を理解する必要性

体育だけでなく、保健体育としてとらえている発言も見られた。保健は、健康を保つために日常生活で活

表4 体育の授業で学んだこと・学ぶこと

重要アイテム	サブカテゴリー	重要カテゴリー
<ul style="list-style-type: none"> <li>互いに影響しあって高めしていく</li> <li>自分にはできないものを他人から見つけたり学んだりできる</li> <li>できない人も得意な人も、互いのメリット、デメリットを認め合ってそれなりの関係を作る</li> <li>友達とアドバイスし合う、一緒に高め合うは一人ではできない</li> </ul>	互いに認め合い高めあう関係づくり	認め合い高め合う関係づくり
<ul style="list-style-type: none"> <li>友達に聞く</li> <li>自分以外の人の気づきが大事</li> <li>自分のことを客観視してくれることで改めて考えるいい機会</li> <li>他人を評価し合ったり、客観視したりする。</li> </ul>	仲間の意見から深まる考え 仲間の評価から得られる自身の客観視	仲間の意見や気づきの大切さと自己認識
<ul style="list-style-type: none"> <li>他人と協力してスポーツをする</li> <li>一人でできないことが二人だからできる</li> </ul>	他者と協力してスポーツをする大切さ	仲間とのコミュニケーションの大切さ
<ul style="list-style-type: none"> <li>他人とコミュニケーションを積極的にとれる機会</li> <li>常に誰とでもコミュニケーションがとれる環境</li> <li>体の面ではなく心の面で力を合わせられる</li> </ul>	仲間と積極的にコミュニケーションをとれる場	
<ul style="list-style-type: none"> <li>チームの仲よさずなを深める</li> <li>チームが変わっても、まとまって何かを達成できる</li> <li>チームで体を動かして協力することで成長できた</li> <li>一緒にスポーツをやることで自然と一体感ができる</li> <li>グループワークとしていろんな人と協力してやることは大事で楽しい</li> <li>先輩達と一緒に話し合ったり考えたり、役割分担したりする</li> </ul>	チーム活動で得られるきずなと達成感	
<ul style="list-style-type: none"> <li>普段の学校生活の仲間と一緒にできること</li> <li>勝ち負けではない</li> <li>協調性や学校だけでしかできないことをやっている</li> </ul>	普段の生活の仲間と活動することの大切さ	学校ならではの活動の必然性
<ul style="list-style-type: none"> <li>自分でチャレンジする</li> <li>チャレンジや試行錯誤して自分で何かを見つける</li> <li>諦めずにやって成果が出る</li> </ul>	自分でチャレンジすることの重要性	自分に必要なものを見つめるための積極的な取り組み
<ul style="list-style-type: none"> <li>自分のために何が必要かを見つけてやるのは体育から始まる</li> <li>家の中でもできることを自分で見出してやる</li> <li>自分に合った運動を見つけ、習慣づけることで健康になる</li> <li>あらゆる場面や状況に対応する力をつけてくれる</li> </ul>	自分に必要なことやできることの発見	
<ul style="list-style-type: none"> <li>根本に技術とか知識を学ぶことがある</li> <li>体の動かし方を言葉や見せることによる伝え方を学ぶ</li> </ul>	体の動かし方の習得とその伝え方	体の動かし方の習得と伝え方
<ul style="list-style-type: none"> <li>楽しむことで心が浄化される</li> <li>全力で体を動かす楽しさ</li> </ul>	全力で体を動かす楽しさ	運動の楽しさと必要性
<ul style="list-style-type: none"> <li>運動をあまりしない人に筋肉をつけて健康に生きるためにやっている</li> </ul>	健康のために必要な運動	
<ul style="list-style-type: none"> <li>保健で学んだ熱中症は体育で活用できる</li> <li>保健でも体育でも共通していることがある</li> <li>体の使い方や機能は共通して学ぶこと</li> </ul>	保健と体育の共通点の存在	保健と体育の共通性
<ul style="list-style-type: none"> <li>自分のからだを健康に保つ</li> <li>健康を保つために必要なことを学ぶ</li> <li>保健は普段の生活で役立てていくためにやっている</li> </ul>	保健での学び1 健康を保つための日常生活での活用	健康の保持と自分の体を理解する必要性
<ul style="list-style-type: none"> <li>保健は体の仕組みや機能を知り、けがをしないためにやっている</li> <li>自分の体を見つめなおす</li> <li>人の意見を聞いて自分の意見を考える(保健)</li> </ul>	保健での学び2 体の機能を知り自分の体を見つめる大切さ	

用するために学んでいることや、体の機能を知ること、自分の体を見つめる大切さを感じている。

保健体育科授業で学んでほしいことは、運動やスポーツ、健康が自分にとって価値あるものであると認知すること、さらには生涯にわたって運動やスポーツに親しむこと、健康について考えることである。「認め合い高め合う関係づくり」では他者との学び合いによって、運動やスポーツの価値の認識を深めていると捉えることができる。「仲間の意見や気づきの大切さと自己認識」や「仲間とのコミュニケーションの大切さ」からは自分にとっての運動やスポーツ、健康の必要性を確認することにつながる。さらには「自分のために必要なものをみつけるための積極的な取り組み」や「運動の楽しさと必要性」は生涯スポーツを楽しんでいくための重要な要素となり、その実践につながることを示している。「健康の保持と自分の体を理解する必要性」は、これらの活動を支える知識基盤となると受け取ることができる。

以上のことから、コロナ禍において、時数が削減となったものの、本校の保健体育科授業の目標に照らし、

学んでほしいことは、十分に達せられているといえよう。

#### 4. 3. 3 これからの体育授業で実施したいこと、期待すること

ここでは、次の7つの重要カテゴリーが抽出された。中学3年生の生徒にとって、残り半年の体育授業で何を実施したいかを探ることによって、体育に対する意欲や自発的な創造性が含まれているのかを明らかにする。

##### (1) チームでの取り組み

チームでしっかりとコミュニケーションをとり、団結して活動することを楽しみにしていることが示された。みんなで一つのものに向かい、きずなを深めるだけでなく、その達成感や充実感を求めていると考えられる。本校では、どの単元においてもグループ学習で授業を進めてきた。仲間との協働で行う学習の楽しさと捉えていることがわかる。

##### (2) 個人の成長を目指す活動

仲間と単に楽しむだけでなく「一人一人の個性を活

表5 これからの体育授業で実施したいこと、期待すること

重要アイテム	サブカテゴリー	重要カテゴリー
<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーションをしっかりとりたい</li> <li>・チームで一体感をつくり、みんなで楽しむ</li> <li>・みんなで団結したい</li> <li>・チームのきずなを深める</li> <li>・チームで一つのことをやる</li> </ul>	チームでコミュニケーションをとりきずなを深められるもの	チームでの取り組み
<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人一人の個性を活かすものをやりたい</li> <li>・できないものでもあきらめずに挑戦し成し遂げる</li> </ul>	各個人の個性を活かす 諦めずに挑戦する	個人の成長を目指す活動
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ルールを自分たちで決める</li> <li>・自分たちでルールを考えると楽しい</li> <li>・技術的なことを教えあう</li> </ul>	自分たちでルールを決める	自主的な運営
<ul style="list-style-type: none"> <li>・体をたくさん動かす</li> <li>・座学はなしで体を動かす。</li> </ul>	体を動かす魅力と楽しさ	体を多く動かすこと
<ul style="list-style-type: none"> <li>・1年生でやったフットサルをやりたい</li> <li>・できなかったテニスをやりたい(テニス部員)</li> <li>・バスケットをやりたい(バスケット部員)</li> <li>・体が硬いのでヨガをやりたい</li> <li>・体育では、やりたい競技をやる。</li> </ul>	経験があるものを再度行う	自身が選択した種目の実施
<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろんな球技をやる</li> <li>・毎回種目を変えてやる</li> <li>・楽しいスポーツをたくさんやりたい</li> </ul>	複数の競技を実施したい	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・やったことのない競技に挑戦</li> <li>・やったことのないものに挑戦</li> </ul>	未知な競技に挑戦する	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しくケガなくやる</li> <li>・感染予防をしてやる</li> </ul>	安全に配慮して行う	安全な活動
<ul style="list-style-type: none"> <li>・保健では自分たちが学びたいものをやる</li> <li>・保健分野と体育分野をリンクさせて学びたい</li> </ul>	保健分野の内容決定 保健と体育の融合した学び	自主的に選択する内容

かすものやりたい」という発言が出されている。個性を活かすということは、自身の適性を見つめる必要性を理解しているとも受け取れるだろう。そのような活動を望んでいる中には、諦めずに挑戦して成就感を味わいたいという発言も含まれている。これは、これまでの活動で得ることができた個人の学びの成果を大切にするとともに、実現したいという思いの表れと受け取ることができる。

### (3) 自主的な運営

「ルールを自分たちで決めて楽しみたい」「技術的なことを教え合いたい」という発言が複数聞くことができた。「今までは先生たちに言われていたことをやっていたんだけど」という発言の裏には、教師の手を離れて自分たちで決めた活動に挑戦したいという思いがあることがわかる。ここでは、仲間という集団で未経験なことに対する挑戦を求めていると言えよう。これまでの授業の経験が、生徒たちの自信となり、自主的な運営に繋がっていると受け取ることができる。これまでに実践したことがない挑戦ではあるが、生徒たちの学びの集大成として、実現させたい活動である。

### (4) 体を多く動かすこと

唯一座学から解放される教科として、今までの運動不足を取り戻すべく、とにかくたくさん動きたいという発言である。体育の授業という場で保障されている運動欲求の充足を期待していることは当然のことであろう。

### (5) 自身が選択した種目の実施

「1年生でやったフットサルが楽しくて」と過去に実施した種目をもう一度やりたい、また部活動が満足にできなかったことからその種目をやりたいという発言が複数あった。一方で「やったことのない種目をやりたい」「毎回種目を変えてやりたい」といった未知なスポーツの実践を求めている発言もあった。両者に共通することは、自分たちで選択するという点である。(3)の自主的な運営と関連させて実現させたい活動である。

### (6) 安全な活動

3年間の中でけがをして満足な活動ができなかった生徒も存在する。最後は安全にけがなくやりたいという発言であった。さらに、まだコロナが収束しないことを想定して感染防止対策もきちんと行う必要性も考えている。授業の場が、安心・安全な場でなければ楽しめない。それを意識する必要性を理解している。

### (7) 自主的に選択する内容

保健の授業は前期で修了するが、「これまでの学習から自分たちが学びたいことをやりたい」「保健の精

神面と体育の実技の部分をリンクさせてやりたい」といった発言を聞くことができた。保健体育の授業では、座学から離れたたい=体を動かしたい、保健の授業はやりたくないという気持ちに繋がりがねないが、保健の授業にも価値を見出し、興味を持っていることがわかった。実技の中で保健分野と関連する内容に触れることにより、その思いを満たすことができたと感じた。

以上のように、「チームでの取り組み」からは仲間とのコミュニケーションによる成果を、「個人の成長を目指す活動」からは自分の適性を見極めての挑戦による成果を価値あるものとしていることがわかった。これまでの授業の成果を意識している表れと受け取ることができる。そして、「自主的な運営」や「自身が選択した種目の実施」、「自主的に選択する内容」といった自発的な活動を望む意見も複数見られた。残り半年間の体育の授業に対して、意欲的な思いを見出すことができたとともに、活動が制限される中で、あらためて自分たちが主体的に実施したいという、授業内容を積極的に考える姿がみられた。

## 5. 総合考察

### 5. 1 状況を客観的にとらえる視点からの思考

研究Ⅰでは、想定外の状況の中で生活していくことにより、自分と学校や友達、自身の体調、家族との関係を客観的にとらえ直して認知する機会になったことが明らかになった。この客観的に物事を見つめる視点は、研究Ⅱで、環境の変化に対応する力を具体的に挙げていることや学校や友達の存在価値を再確認していることから活かされているといえよう。さらに研究Ⅲでは、保健体育科授業での仲間とのコミュニケーションの必要性を、単に活動を共にするためではなく、異質な他者としての仲間との共同的活動から育まれる気づきや再考といった学びにつながることを挙げている。このように、状況を客観的に見つめる視点によって、さらに深く掘り下げる思考が生まれたことがわかった。

### 5. 2 スポーツフェスティバルの実施に対する思い

研究Ⅰでは、どの学校行事に対しても、8割近くの生徒が実施したいと答えていた。体育的行事であるスポーツフェスティバルに関しては、実施したかった理由として「他学年と交流できる」「スポーツが好き」「他のクラスと対戦したかった」等が挙げられていた。

それは、研究Ⅱで、体育で学んだこととして「友だちやチームで活動するスポーツの楽しさと重要性」を約半数の生徒が挙げていることから理解できる。これらのことから、チームスポーツに楽しさや価値を見出している生徒が多く存在していることが明らかになった。さらに研究Ⅲでは、コロナ禍においてもスポーツフェスティバルが例年通りに実施できるためには何が必要か、工夫することはできないかを考えている発言を聞くことができた。単に、情感的な楽しさを求めているのではなく、縦割りチームでの他学年の生徒と一緒に話し合ったり、考えたり、役割分担したりといったことから生まれる学びを価値づけ、スポーツフェスティバルがその重要な場であると認めているからであると受け取ることができた。

### 5. 3 学校生活を共にする友達との活動の価値

研究Ⅰでは、長い休校期間により友達との関わりに対して、約5割の生徒が「近づきにくくなった」「同じグループでしか話さない」「友だちが減った」「うわさを立てられる」等の「困ったこと」をあげており、うまくコミュニケーションがとれないことが示された。しかし、研究Ⅱでは学校の再開に伴い、友達の価値に対してポジティブな思いを抱くようになってきていた。さらに研究Ⅲでは、学校生活を共にする友達だからこそ、一緒に活動することに意味があるという発言が見られた。また、研究Ⅲでは、「認め合い高め合う関係づくり」や「仲間の意見や気づきの大切さと自己認識」「仲間とのコミュニケーションの大切さ」が重要カテゴリーとして挙げられたことから、生徒は、仲間と協力しながら活動することや試行錯誤しながら進めていくことを必要とし望んでいることが確認された。このような活動は、じっくり進めていくことによって成り立つものである。よって、このような学びの過程を保障する時間が必要であることが示された。

## 6. 結論

コロナ禍であっても、自身や現状を客観的に見つけ、今の自分に必要なことや学びを考えている生徒が多く存在していた。保健体育科授業に関しても、自分にとっての運動やスポーツ、健康の価値を認めている生徒が多かった。また、他者とのコミュニケーションから生まれる学びを追求したり、自分たちにとって望ましい授業や行事になるよう考えたりすることは、生涯にわたって運動やスポーツに親しもうとする態度につながると期待することができた。

生徒が望む授業の条件は、仲間とのコミュニケーションがしっかりとれること、試行錯誤しながら自身を高めることができることが挙げられていた。この条件を満たすためには、一つの単元において相当な時間と過程が必要となる。コロナ禍で授業不足となっても、種目を選定し、1つの種目をじっくりと学べるよう、十分な活動時間を保障できる単元を計画するべきであろう。

また、生徒たちは自発的な活動を望んでいた。活動が制限されてもそのなかで工夫できることはないかを考える姿は、教師にとって望ましい姿でもある。しかし、コロナ以前にも、このような自発的な活動を保障できていたか、改めて見直す必要があるのではないだろうか。

今後求められる質の高い授業には、子どもたちと教師が共に話し合い、考え、解決しようとするのが不可欠である。またそれは、子どもたちに、これからの予測不能な世の中に立ち向かい、適応できる力を育成することにもつながると考えられる。教師が保健体育科授業の目標や内容を生徒と共に考えるとともに、その際に起こりうる課題を共に解決しようとする姿勢を実現することが、今後の課題である。

## 参考・引用文献

- 1) 高階玲治：ポスト・コロナ時代の新たな学校づくり, pp.138-157 東京(学事出版株式会社) 2020
- 2) 高階玲治：コロナ後、授業をどう変えるか, pp.95-96 高階玲治 編 ポスト・コロナ時代の新たな学校づくり, 東京(学事出版株式会社), 2020
- 3) 秋田喜代美:ポスト・コロナの学校を描く, pp.50 - 54, 東京(教育開発研究所), 2020
- 4) 奈須正裕:ポスト・コロナショックの授業づくりにおける三つの問い, pp.8- 87, ポスト・コロナショックの授業づくり, 東京(東洋館出版社), 2020
- 5) 石井英真：子どもたちの「学びを保障する」とはどういうことか, p.70, ポスト・コロナの学校を描く, 東京(教育開発研究所), 2020
- 6) 野井真吾:コロナ禍の子どものからだどころ, 体育科教育, 4月号, pp15-16, 2021
- 7) 森敏生:子どもの学ぶ権利と体育実践, 体育科教育, 4月号, pp18-19, 2021
- 8) スポーツ庁政策課学校体育室:今年度の体育における学習活動の取り扱いについて(報告)  
[https://www.mext.go.jp/sports/content/20201007-spt\\_sseisaku02-000010400\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/content/20201007-spt_sseisaku02-000010400_1.pdf) 2020 (2020.7.26覧)

# コロナ禍における保健体育科授業の学び

— 中学生の視点からの考察 —

## Learning in Health and Physical Education Classes under Coronavirus Pandemic: Considerations from the Perspective of Junior High School Students

上野佳代・佐見由紀子

UENO Kayo\*<sup>1</sup> and SAMI Yukiko\*<sup>2</sup>

教育実践創成講座

### Abstract

The purpose of this study was to clarify the reality of junior high school students' learning in health and physical education classes at coronavirus pandemic. In the second year of junior high school, students completed an anonymous self-administered questionnaire and report, and in the third year, group interview surveys were conducted. The results showed that (1) students recognized the importance of improving each other through awareness and reconsideration generated by interaction with peers, and (2) they understood the fun and necessity of classes and events and wanted to engage in them voluntarily. In addition, it was found that the learning objectives of the health and physical education classes were generally achieved. The future challenge is for teachers to have an attitude of discussing and solving problems together with students in order to guarantee the independent activities that students want in class.

Keywords: Health and Physical Education Class, Coronavirus Pandemic, Junior High School Students

*Advanced Studies on Training Educational Practice, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

### 要 旨

本研究は、コロナ禍における保健体育科授業での中学生の学びの内実を明らかにすることを目的とした。中学2年次には、無記名自記式のアンケート調査、レポート記入を求め、3年次にグループインタビュー調査を行った。その結果、①生徒は仲間との関わりから生まれる気づきや再考を通して互いに高めあうことの重要性を認めていること、②授業や行事の楽しさと必要性を理解し、自発的に取り組みたいと考えていることが示された。また、保健体育科授業で目標とした学びもおおむね達成されていることがわかった。さらに、今後の課題は、授業で生徒が望む主体的な活動を保障するために、教師が生徒と共に話し合い、解決する姿勢をもつことである。

キーワード：保健体育科授業、コロナ禍、中学生

---

\* 1 Koganei Junior High School attached to Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan)

\* 2 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan)